

2025 年度 地域子育て支援事業報告

1. はじめに（概況）

2025 年度、当乳児院では、地域における子育て支援の拠点として、ショートステイ事業および CoCo ひろば（親子支援事業）を中心に、妊娠期から子育て期まで切れ目のない支援の充実に取り組んだ。

ショートステイ事業では、利用ニーズの高まりを背景に、要支援度の高い家庭や緊急利用ケースへの対応が増加した。CoCo ホーム職員と地域支援担当職員が連携し、家庭状況に応じた柔軟な受け入れと丁寧な支援を行ったことで、継続利用や保護者の安心感につながっている。

CoCo ひろばでは、低月齢児の利用が増加し、親子の交流や情報交換の場として地域への定着が進んだ。育児講座や季節行事など多様なプログラムを実施するとともに、地域イベントや関係機関との連携を通して周知と地域とのつながりを広げた。また、対象年齢を超えた親子向けに「ホームカミングデイ」を設け、継続的につながることのできる居場所づくりを進めた。

今年度は、自治体から利用を勧められて CoCo ひろばへの参加につながるケースも複数見られた。また、ひろば利用からショートステイ利用につながるケースや、その逆のケースもあり、両事業が相互に機能しながら、地域の親子にとって身近で頼れる場となりつつある。

一方で、マタニティサロンは CoCo ひろばと一体的に実施したものの、妊娠期の新規利用者の参加には十分つながらず、引き続き周知方法や受け入れ体制の工夫が課題となっている。

運営面では、自治体や関係機関との連携強化、ICT ツールを活用した情報共有の効率化、業務手順の見直しなどを進め、安全かつ質の高い支援体制の構築に努めた。今後も、多様化・複雑化する子育てニーズに対応し、地域に開かれた安心できる居場所づくりを推進していく。

2. ショートステイ事業

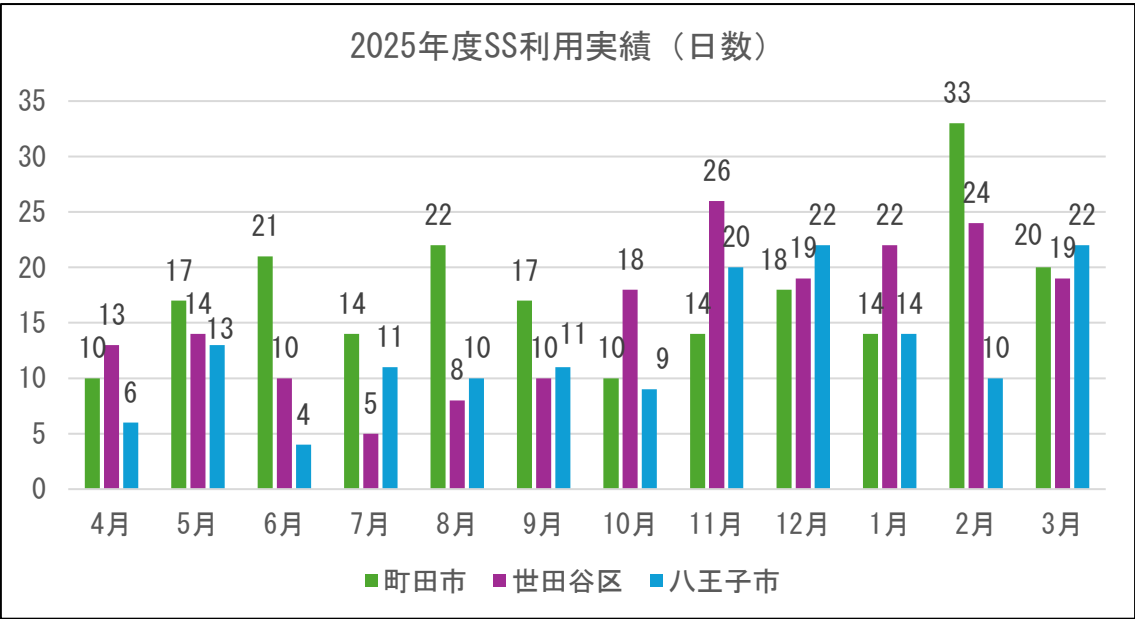
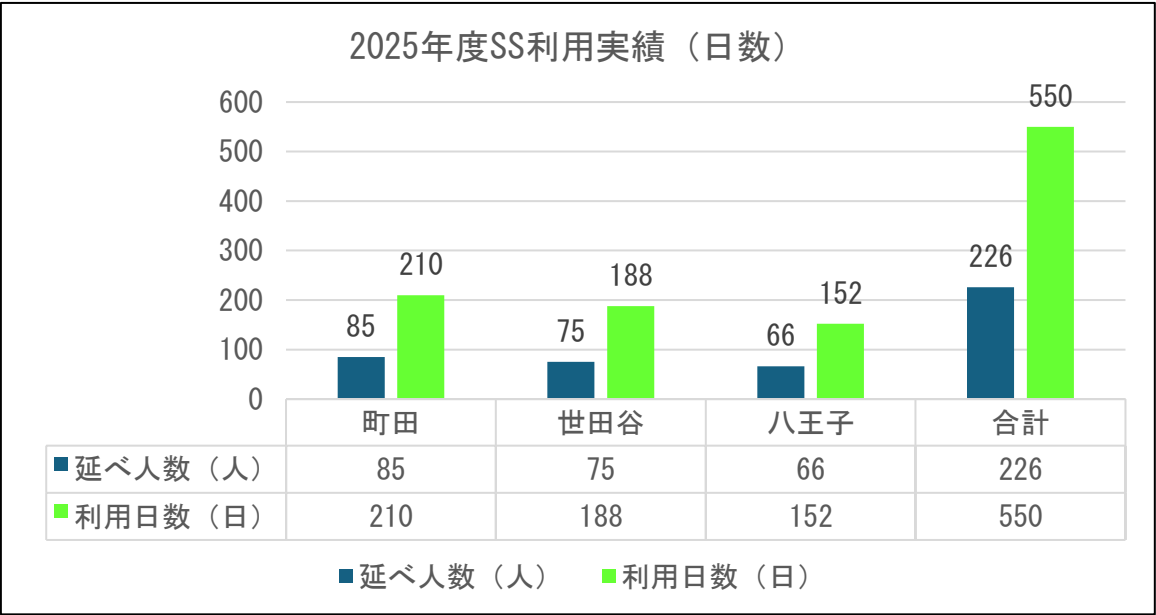
2025 年度は、引き続き利用ニーズの増加傾向が見られ、特に年度後半には緊急性の高いケースや養育困難、保護者のメンタル不調等を背景とした利用が増加した。

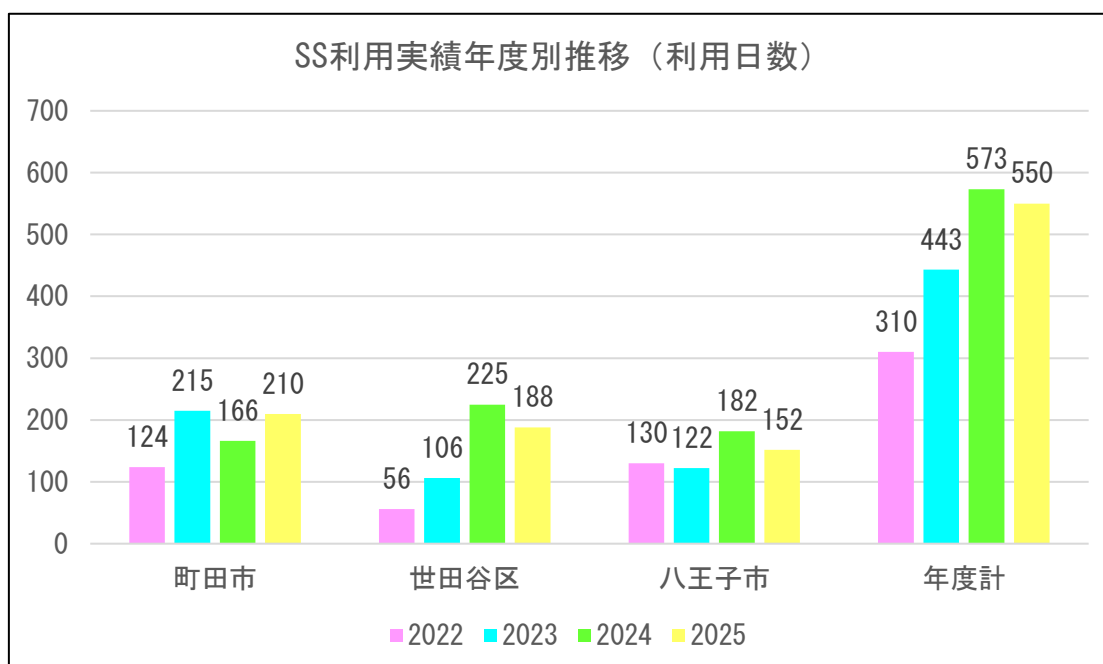
事前の聞き取りでは、保護者の不安軽減に配慮しながら丁寧に情報収集を行い、乳児の発達や生活状況を踏まえた個別的な対応を実施した。利用中は、子ども一人ひとりの不安や情緒に寄り添い、1 対 1 での関わりを重視することで、安心して過ごせる環境を整えた。その結果、食事や睡眠の安定、遊びへの意欲の向上など、子どもの前向きな変化が見られた。また、送迎時には利用中の具体的な様子を保護者に丁寧に伝えることで、安心感の提供と信頼関係の構築につながり、継続利用への動機付けにもなった。

運営面では、ショートステイ担当職員と CoCo ホーム職員が密に連携し、ケースごとの課

題共有や対応方針の統一を図った。一方で、ショートステイ利用の増加に伴い、CoCo ひろばの参加者も増加しており、ひろば開催中にショートステイの送迎対応が重なる場面がしばしば見られた。そのため、一時的にひろば対応職員が手薄になることもあり、安全面や運営体制の維持が課題として挙げられた。次年度は、ひろば活動の安全性と支援体制の充実を図るため、ボランティアの活用についても検討していきたい。

さらに、利用増加に伴う人的配置の調整や、時間帯による業務負担の偏りなどの課題も見られたため、今後はより安定した受け入れ体制の整備が求められる。





3. CoCo ひろば（親子支援事業）

週 2 回の定期開催を継続し、地域の親子が安心して集える場として安定した運営を行った。特に今年度は低月齢児の利用が増加し、落ち着いた雰囲気の中で、親子同士の自然な交流や情報交換が活発に行われた。利用者からは「生活の一部になっている」との声も聞かれ、日常的な居場所として地域に定着していることがうかがえた。また、自治体から利用を紹介され、参加につながるケースも見られた。広報面では、X（旧 Twitter）を活用し、ひろばの予定や活動報告を継続的に発信した。

安全面では、ゲート増設など環境整備の見直しや職員による見守りの強化を行い、安心して活動できる環境づくりを推進した。また、職員の名札着用により、利用者との関係性の向上や親しみやすい雰囲気づくりにもつながった。

プログラム面では、育児講座（皮膚ケア・事故予防・離乳食等）やスノーズレン体験、遠足、クリスマス会など、多様な活動を実施した。栄養士との連携による相談機会の提供や、ボランティアの協力による運営体制の強化も図られ、保護者の満足度向上に寄与した。また、助成金を活用した環境整備により、身体を動かす遊びやリラックス空間の提供が可能となり、活動の幅が広がった。さらに、町田市の地域イベント（まちカフェ）への参加を通して広報活動を行い、新規利用者の獲得にもつながっている。

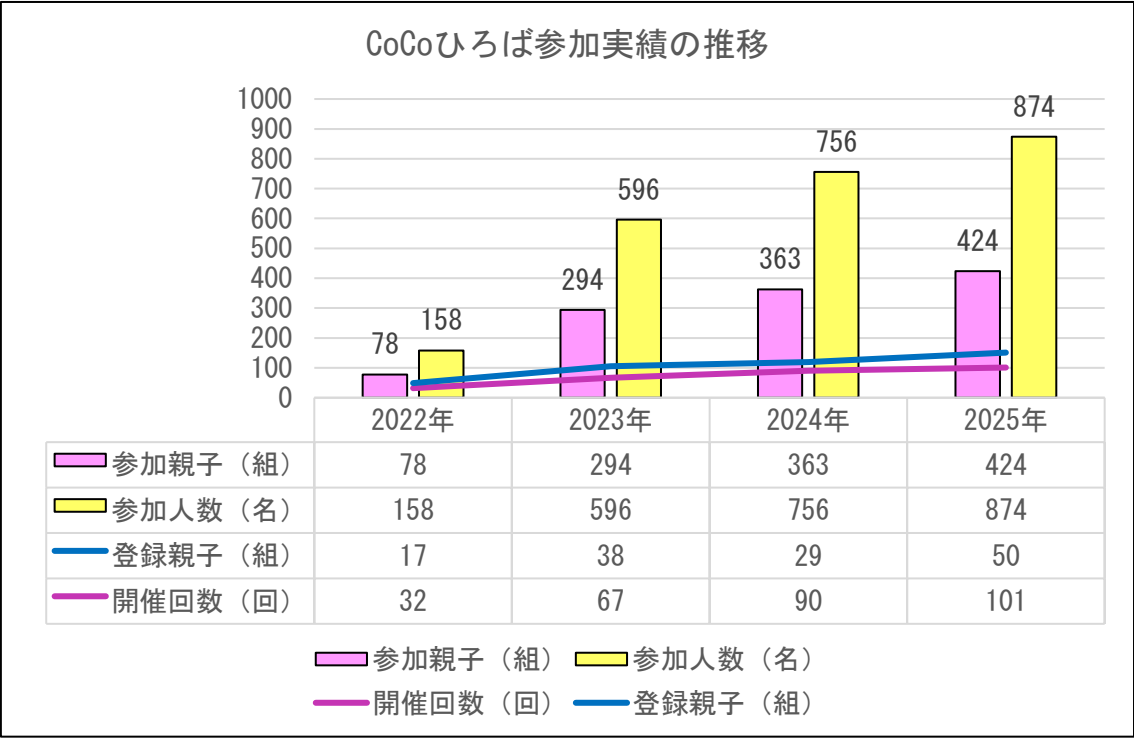
2025 年度には、新たに「ホームカミングデイ」を実施し、ひろばの対象年齢を超えた親子が再び集える機会を設けた。地域の子育て世代が細く長くつながり続けられる居場所として、新たな役割にも取り組んだ。

CoCo マタニティサロン

2025年度は、単独開催から CoCo ひろば内での実施へと形態を変更したが、妊娠期の新規参加者の獲得には至らなかった。地域全体として産前イベントへの参加が少ない傾向も見られており、周知方法や実施形態について引き続き検討が必要である。

一方で、CoCo ひろば参加中の保護者からは、「妊娠中にも来てよいことは知っていた」「赤ちゃんが生後3か月になったら親子で行こうと思っていた」といった声が聞かれた。また、親族からの問い合わせもあり、事業の存在自体は少しずつ認知され始めている手応えも感じられた。

今後は、関係機関との連携をさらに強化しながら、妊娠期から気軽につながることもできる参加しやすい仕組みづくりや周知方法を検討していきたい。



4. 運営

【支援体制の構築】

各自治体の子ども家庭支援センターや関係機関と密に連携し、日常的な情報共有を通じてケース理解を深めた。ショートステイ利用時の気づきや変化については速やかに共有し、必要に応じて対応を協議する体制を整えた。

【地域との連携】

地域子育て支援連絡会への参加や、複数機関との協働事業への参画により、地域ネットワークの強化を図った。「さかいキッズ」（小山境地区の子育て機関が協力して親子の居場所を提供している）や、「きがるにひろば」（小山境市民センター内のひろば）など新たな取り組み

への参加も決定し、今後の連携拡大が期待される。また、助産師会や地域団体との新たな関係構築も進んだ。

【安全かつ適切な業務遂行】

日常的に CoCo ホームとの往来や情報共有を行い、児の健康状態や生活状況の把握に努めた。ICT ツールの活用により、スケジュールや利用情報の一元管理を実現し、業務効率の向上につながった。

【業務の見直しと標準化】

業務上のミスを契機とした手順の見直しや、書類管理方法の改善など、実務に即した改善を迅速に行った。また、勤務体制の調整や休憩時間の確保に努め、働きやすい職場環境づくりにも取り組んだ。

5. 対外業務について

町田市・八王子市・世田谷区をはじめとする各自治体との連絡会やネットワーク会議に参加し、利用状況の共有や課題検討を行った。また、見学対応や研修参加を通じて相互理解を深めた。

地域との関わりとしては、相談会や地域イベント、子ども食堂、自立援助ホーム等への訪問・巡回相談を実施し、地域における子育て支援の役割を担った。さらに、里親家庭への訪問など、多様な家庭支援にも取り組んだ。

加えて、広報活動や取材対応（読売新聞社会面 9/25 掲載『乳児院〈養育〉の先へ』）、実習生への指導などを通して、事業の理解促進と人材育成にも寄与した。

6. 2026 年度に向けて

ショートステイ事業では、増加する利用ニーズおよびケースの複雑化に対応するため、受け入れ体制の強化と職員間の連携強化を図るとともに、自治体との調整を進めていく必要がある。

CoCo ひろばにおいては、利用者ニーズを踏まえたプログラムの充実と安全な環境整備を継続し、地域における居場所機能をさらに強化していく。

マタニティ支援については、関係機関との連携や広報手法の見直しを行い、妊娠期からの支援につながる仕組みづくりを再構築する。

今後も、地域の多様な子育て家庭に寄り添い、予防的支援の視点を重視しながら、安心して子育てができる地域づくりに貢献していく。